

— 絶滅危惧植物を育てる —

ムジナモ

高橋 務

ムジナモ（モウセンゴケ科）は、二枚貝状の葉によるわな型の捕虫様式をもつ水中に浮遊する食虫植物で、日本では牧野富太郎博士によって明治32年（1890）5月に、江戸川流域の用水池で発見され、ムジナモと命名された、貉（ムジナ）は狸の異名で全体の形がふさふさした狸の尻尾に似ているところから名付けられた。

世界的には、朝鮮、中国（東北）、インド、ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリアなど、広く点々と分布していたが、次々に消滅し、現在自生地は確認されないという。

日本では、利根川流域に数か所、信濃川、淀川、木曾川流域の各1か所に自生地があったがいずれも消滅し、昭和41年（1966）5月、埼玉県羽生市宝蔵寺沼の自生地が国の天然記念物に指定されたが、同年8月の台風の水害で流失し、唯一の自生地も失った。

現在はムジナモ保存会や食虫植物研究会の会員が栽培増殖したものを自生地に戻すことによって消滅をまぬかれているという。

ムジナモの人工的な培養増殖については、広島大学理学部で成功したと報じられたこともあり、特異な食虫植物の魅力から愛好家が栽培に取り組んでいることも、インターネットに多くの情報が公開されていることによって知ることができる。

私のムジナモ栽培は、1987年に着任した学校で、水槽（60cm）に栽培されていたのに出合った時から始まった。

そのムジナモ栽培水槽は、水が少なく汚くなっていたので、栽培を継続すると共に観察できるようにと水を加え、どろどろした植物遺体を取りのぞいた。ところが、それが悪かったのか、その後、生育が悪くなり、全体が細くなってしまい、あわてて、屋外にプラスチック水槽を設置して、土を入れ水を張ってイネを植えた中に移したが、緑藻の発生の方が勢いがよくて、生育は芳しくなかった。

同時に、自宅でも大型の水槽（48×77×18cm）に、土を1/3位入れ、ヒメスイレン、デンジソウを植込み、水を張った中で育てることにした。

栽培法は、以前からムジナモ栽培を手がけている坪谷富男さん（加茂市）から教えて頂き、さほど難しく考えず取り組んだ。

ところが、ムジナモは、春から夏にかけて順調に生育しても、夏になって水温が高くなると、緑藻類が発生し、ムジナモにからまりつくようになると、二枚貝状の捕虫葉の発達が悪くなり草状が細くなる。すると、晩秋にできる越

冬芽が小さくて、翌春の生育が悪くて消滅してしまう。ムジナモの生育環境をつくることと藻類の発生を抑制することを両立することがなかなか難しかった。

発生する藻は、手で取り除くが、除ききれず、栽培に失敗することを繰り返した。その都度、坪谷さんからムジナモを分与して頂き、同じくムジナモ分与をうけた小国生物友の会（岩野俊逸会長、事務局、高橋実）会員と相互に、栽培についての情報を交換したり、順調に殖えたときには、互いに分与しあったりした。そして、最近になってようやく順調に育つようになった。

現在は、次のようにして栽培している。

No.	水槽（縦×横×深さcm）	併せて植えた植物	日照状態
1	角型水槽（33×42×16）	ホタルイ、コナギ	12時から日没まで
2	角型水槽（26×31×10）	イネ、ジュンサイ	同上
3	丸型水槽（直径30×33）	アサザ	10時から13時まで

いずれにも、稲藁を20cm位に切ったものを一掴み沈めて置き、時々入れ替える。水温は30℃を超えることもある（写真1）。



写真1 No.1水槽のムジナモ中央に開花中のものが見える。

今年（'00）も順調な生育で、7月下旬に各栽培槽の個体数を、No.1、約50個、No.2、30個、No.3、100個、に調整し、余分なものは予備の水槽に放した。

8月上旬になって、生育の良い数個体に、先端に近い一節で輪生する葉が最大～12枚まで増加し、水面側は二枚貝状の捕虫葉が形成されないという変化がみられ、その節から花柄が1本立ち、No.1、水槽に7個、No.2、水槽に1個のつぼみをつけ、8月12～21日の10日間に、第1、2花は開花しなかった

が、第3～8花が開花。花は12時前後に開いて、約2時間程度で閉じた。花は緑白色の径約5mmの小さな花(写真2)で、閉じた後は花柄が曲がり水中に没した。

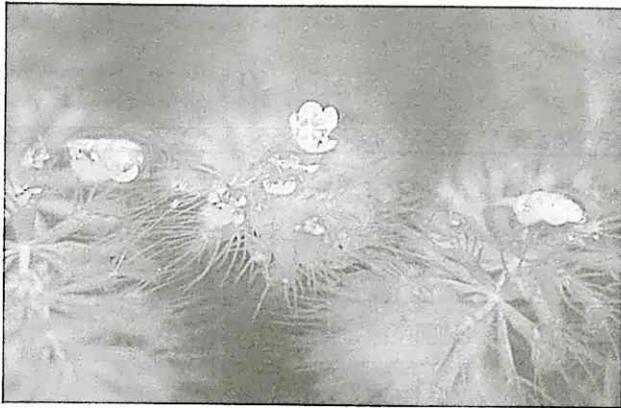


写真2. ムジナモの花 左は果実、右は前日開花したもの。

今年のムジナモの生育は順調で、開花をみることができ、花後の結実から種子繁殖という、次の課題をもつことになった。また、夏から秋に次々に分枝して多くの越冬芽を作って、増殖に期待がもてそうである。

絶滅危惧種ムジナモを育てることは、物珍しさから始まり、今のところ順調にしている。しかし、ムジナモは生育環境の変化に気難しいものがあるから、いつまた生育不良になって消滅してしまうかもしれない。

これまで何度か栽培に失敗してきたが、その都度、坪谷さんや小国生物友の会から分与をうけてきた。絶滅危惧にある種の保存ということを考えると、ムジナモを栽培する人がもっと多くなってほしいと思う。

最近、学校に地域の水辺環境に接し、身近なところで自然の生物の生態を学ぶ場としてビオトープを作るところがある。自然に住み着く生物だけでなく、身近な生物であっ

たメダカも、絶滅危惧種といわれて見直されて放されるが、ムジナモを水生植物として組み入れることができれば、食虫植物のもの珍しさ、自然のバランス維持の難しさ、絶滅危惧種を育てるなど、自然教育の素材として役立つと思う。

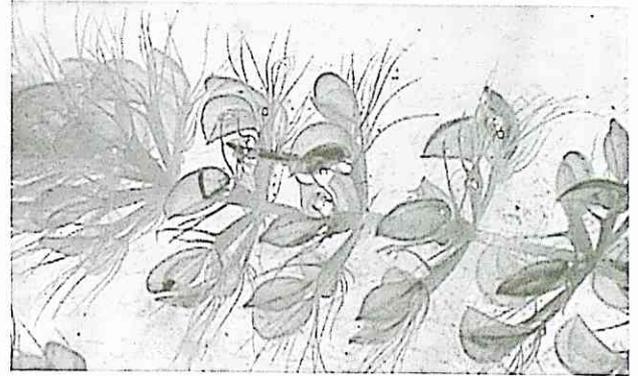


写真3. ぼうふらを捕えたムジナモ捕虫葉

また、ムジナモ最後の自生地となった埼玉県羽生市には、県営さいたま水族館が設立され、小学校や愛好家の手によって保護増殖がはかられているようだが、かつて信濃川流域にムジナモ自生地があったというのだから、近年県内各地につくられている水辺公園で、その一隅に絶滅が危惧される水生生物や湿生植物を保護し、種の保存をはかることができないものかと思う。

この小文を書くにあたって、坪谷富男さんからムジナモ栽培の契機と失敗する度に分与していただき、栽培法を教えていただいたこと、心より感謝いたします。

付記・ムジナモを栽培してみようという方、秋に越冬芽が出来た頃、大型定形封筒(120×235mm)に宛名記入し160円切手添付してお送りください、お分けします。

鈴木 清 1902 むじなもノ分布ト利根川 植物学雑誌 16(180):39-40 ('00. 9. 1. 記)

日報抄

三面川の上流、奥三面(岩船朝日村)の遺跡群を歩いた。「周囲は縄文時代と同じ風景です」▼朝日村教委文化財係長の高橋保雄さんの説明に驚かされた。十九の遺跡がある。足元には堅穴住居跡など古代の名残が広く点在し、目には原始の風景が飛び込む。三千年のトンネルを一気にくぐり抜け、心は縄文人と会話をしている。「秘境といわれた地で、道がなかったため林業に不向きで植林が行われなかった」と高橋さん▼これが幸いして、クリ、トチ、クルミ、ブナなどが茂る縄文の風景が残った。縄文人の生活は、林と一体だった。木の実を食料にして、樹皮やつるを生活用品にした。ウサギやクマなど生き物もいた。ナラ林はぐくまれた文化だった。周囲は六百一十の山々に囲まれて、われわれの感覚からいえば大変不便

(昭和16年7月30日第三種郵便物認可)

(日刊)

な所だが、縄文人には豊じょうな土地だった▼それにしてもよくこの土地を見つけたと思う。三万年も前から、旧石器時代人が訪れていた。四千五百年前には定住していたとみられ、元層敷遺跡は千年以上も続いた。一九八五年に閉村した三面集落の人たちも、自然と共存した。「山に生かされた」村といわれ、自らを「山人(やまご)」と呼んだ。縄文人に通じる心があった▼遺跡には縄文人の知恵が詰まっている。水はけをよくするため砂利を敷いて道を作った。住環境を区画するため、掘削して川の流れを変えた。壘六十八枚分の東日本有数の住宅跡もある。計画的な村づくり、土木工学には目を覚張った▼間もなく縄文人の会話はできなくなる。建設中の奥三面ダムは十月二日から、水をため始め貴重な遺跡群、縄文の知恵は水没する。